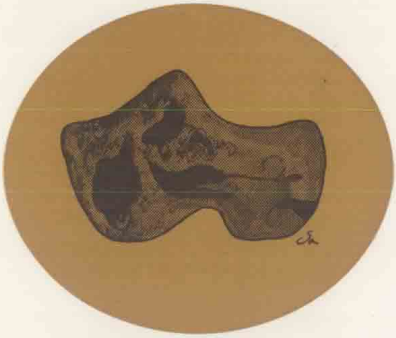
女と冒険

女と冒険



萩原葉子

読売新聞社

女と冒険

昭和四十八年六月十五日　第一刷

著者　萩原葉子
発行者　松田延夫
発行所　読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町七七　〒五三〇
北九州市小倉区明和町一の一一　〒八〇二
印刷所　株式会社細川活版所
製本所　ナショナル製本株式会社

定価　七八〇円

©, YOOKO HAGIWARA, 1973
0095-701190-8715

目次

I 女の不思議さ……7
女とウエスト 9　かがみと女 13　女性と冒険 18　女とストッキング 22　女とカツラ 23　刺青と女心 27　髪型と人相 29　女と年齢 33　既製服について 36　女とおしゃれ 38

II 社会時評……41
私の青春時代 43　シロウト時代 46　愛の不毛時代 49　現代人の不幸 52　マスコミ時代の交友 55　面白い時代 58　物よりも心を贈る 62　心より物質の時代に思う 66　子供の言葉に耳を傾けて 69　不器用 71　小さな公害 74

III 私の人生論……77
「スピード結婚」に思う 79　精一杯生きる 83　精神を伴った恋愛を 85　私の健康法 97　青春の思い出胸に 103　想像力について 105　「根性」について 114　積極的に生きる自信と私 117

IV 父・朔太郎のこと……141
猫町 143　父のこと 145　「朔太郎展」のこと 151　朔太郎の父性 156　私の処女作 159

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

V 忘れ得ぬ人々……161
西脇順三郎先生のこと 163　辛夷の花と三好達治さん 167　山室静さんのこと 171

VI 私の趣味……175
観劇と私 177　文楽のこと 180　かくし芸と私 185　ランプ 189　土蔵の中の時計 193　箱膳 197　女の足枷 199　女の生命 201　箱枕 203　瓢箪 205　物見遊山の頃 207　灯す 209　酒と文化 211　角樽 213　たばこと個人主義 215　ふるさとの料理 217　競技用ダンスを披露して 219　ラ・クンパルシータと私 223　黄色の嘴 227　日本人の社交ダンス観について 230　田中恭吉のこと 237　ジャンヌ・エビュテルヌの肖像 240　本物を見る目 242　童話について 244

VII 雑感……247
ぼろ市 249　ベッド 251　「上毛三山」について 254　改札口 260　「出会い」について 265　カットと装幀 268　著者と初版本 270　お歳暮について 275　師匠と弟子 278　萩と私 281

あとがき……285

装丁　重原保男
カット　萩原朔美

女と冒険

I

女の不思議さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

女とウエスト

女はウエストが蜂のように細くくびれている。胸と腰の中間で、両者の重さを軽く受け止め、プロポーションを良くするための役割をしているのだ。

中間の締まりがなければ、鈍感な見るから重苦しいスタイルとなり、女らしい可憐さは失われる。洋服を着なかった時代の女は胸から腰まで、一本のローソクのように細長い身体であった。不健康そのものが美の要素であり、美人は結核で早死するものと決まっていたのだ。

体格が良くて蜂のように締まったウエストの持ち主がいて、人知れず悩み、わざと病気になって、ローソクのような身体に変えた昔の女の人がいたかも知れない。

不健康が売りものの時代は去り、健康美を求められる今日の女は幸福だ。ミス・ユニバースやミス日本等の代表に選ばれた女性は、ウエスト五十、バスト九十など、普通の人間

では考えられないような比率を見せている。

そんな女性は普段の生活は何をしているのか？　と不思議に思う。食事の制限は元より厳しい訓練をしているのか。生まれつき恵まれた肉体なので、食べようと怠けようと崩れない素質を持っているのか？　等と憶測する。ともあれ彼女達も人の子で、蜂や瓢箪の子ではないのである。生まれつきの恵まれた肢体の他に努力もあるだろう。いずれにしても普通人の及ばないところである。

高嶺の花を眺めて嘆息ばかりしていても始まらないので、私はずん胴のウエストを何とか細くしたいと、考えた。私も女の端くれで、まだおしゃれを捨て切れないのだった。考えてみると女学生時代には、たしかにウエストは締まっていたのである。それがいつの間にかずん胴になったのだ。

一念発起の気がまえで、私はウエストを細くする決心をしたのだった。あれこれと運動を試みたが、競技用ダンスの効果は大きかった。

元々どんなダンスでも全身を引き締めて踊り、ゆるめては踊れないものだ。特にウエストと背骨の辺り（腹筋）に力を入れるので、自然に贅肉が取れるのだろう。

私は毎日ウエストを計ったり、体重を計ったりすることに興味を覚え、グラフに記録するほど運動と痩せることに関心を持つようになったのだった。

ウエストが次第に細くなると、私は天にも登るような気持ちを覚えた。鏡を見てはよろこび、ショウ・ウインドウに映る度に確認しながら歩いたりもした。そして自分のウエストの細さに満足したのだった。

「ウエスト何センチ？」と聞かれると私は待っていましたとばかり、

「五十九センチから六十センチになったの」と答えた。

「うわあすごい。娘の寸法じゃないの」と、更に驚く相手を見て、私は尚更うれしかった。相手が驚くのもむりのないことで、クラス会に行ってもウエストどころか胸もヒップも区別なしに巨大で偉大な贅肉がついている人は珍しくない年なのである。

胸囲を計った方がまだ細いと思われる婦人もいるほどで、うっかりすれば私もそんな巨大なウエストになったかも分からないのだった。

私は締まっていく自分のウエストに急に関心を持つようになったのも、面白い女の心理だった。

不思議なことに似合わなかった洋服が似合うようになったので、若い頃の洋服も引っ張り出して着られることは経済的であった。といっても若い頃の洋服は進駐軍の払い下げの品や古物利用の継ぎだらけの洋服ばかりで、着られるものはほんの少しであるが、それほど古い服や安ものを着ても高価な誂え服を着ていると見られるのだった。これは面白い現

象であった。その上「恋愛をしたので、スマートになったのよ」と噂し、架空な物語を想像されるのには、一層のおどろきだった。

女にとってウエストがあるとないのとでは、こんなにまでも違ってくるのかと、私はつらつら思うのだった。若い女が必死でウエストを細くしたいと願うのも無理からぬ話であると思った。

ともあれ、私も蜂や瓢箪とまではいかないにしても、ダンスのおかげで三十センチの差で、胸とヒップを締めるウエストの存在ができたことはありがたかった。灰色の人生がバラ色に見え、明るくなったのである。女にとって人生が開けて来るのは、やはりウエストを細くしなければならないと、私は思うのだ。

（一九七二年九月「月刊ペン」）

かがみと女

鏡を見るとき女は夢を見ている。自分の顔が白雪姫でもあるかのような錯覚に捉われてうっとりするのだ。人間はおもしろいもので、たとえ醜女でも見馴れると美女に見えるのである。自分の顔が醜いと思うなかにも、どこかに美点があると考えなくては、生きてはいけない。他人が醜いと思う部分も、自分が思わなければ世の中はバラ色だ。反対の場合は灰色である。

鏡を見るとき、自分のいちばん美しい顔を作るので、本人はその作った顔がほんとうの顔だと思っている。だが、実はその裏の無意識に働く千変万化の顔があるのだ。役者は職業柄、自分の顔を客観的に見極めて研究しているのだろう。プロ意識に目覚めている人は醒めているが、普通の人は真の自分の表情を知ろうともしないで鏡の前の表情のないとり澄ました顔だけが、自分の顔であると考えている。

デパートの洗面所で、こっそりコンパクトをのぞき、粉白粉をはたいている時代は過ぎて、今日の女性は鏡をわがもの顔に占領しているのだ。つけ睫毛をつけたり、シャドウを入れたり、楽屋の鏡そこのけである。ナルシズムの境地に入っているので待っていれば日が暮れる。

後ろでいらいらして待っている人のいることなどものかわだ。昔は美人でなくては、公衆の大鏡で化粧はしなかったが、いまは醜女であろうと、おへちゃかぼちゃの類であろうと、ゆうゆうと占領している。美人の範囲が広くなったせいであろう。中にはあるのかないのか、わからないような眼につけ睫毛をつけながら「この睫毛できが悪いったらないわ。すぐ取れっちまうよ」と、言ったりする女もいる。

私は前に『うぬぼれ鏡』という随筆集を出したが、その中に〝うぬぼれ鏡〟で自分の姿を見たときの女心を書いたものがある。たいへん美人に映るので、自分がエリザベス・テーラーにでもなったような気がして喜んだという文章だった。考えてみれば女というものは他愛ないものだ。

たかだか鏡のいたずらで、美人に見えるだけであるのに〝うぬぼれ鏡〟の前には、大勢の女が立ってうっとりと、わが姿を眺めているのだった。そして喜ばせたあとは、笑わせ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com